

往生人と一切経

田 中 夕 子

はじめに

院政期には一切経は盛んに書写、供養されている。それは末法思想の浸透に伴い、往生伝が次々と編纂された時期でもあった。往生伝では、往生人は往生するのにふさわしい行業が求められていた。重松明久氏は『日本浄土教成立過程の研究』において、浄土教が民衆の生活のなかでいかに受容され、実践されていったかを明らかにするために往生伝の行業に注目された。

往生伝を個別に取り上げ、そのなかの行業（特に念仏・法華・禪定などが中心）を分析してその意義を検討している。

重松氏の研究は、その後の研究に多くの影響を与えたが、本格的に取り上げられることが少なかったのが、造寺・造仏・写経なども往生のための重要な行業として行われていたことであ

る。^①なかでも一切経書写は最大の善業として説かれているのである。よって本稿では、『日本往生極楽記』以下、平安時代に編纂された六往生伝において、一切経に関わった往生人を紹介、検討を行い、一切経が人々の信仰に与えた影響について考察してみることとする。

往生伝における往生人と一切経の関わりは（一）披閲・修習〔修学のため、往生のため〕、（二）勧進、（三）書写〔往生のため、仏法弘通のため〕、（四）その他に、分類されるのであるが、多くの人々の協力を得て書写し、その功德を共に得ることができる一切経書写勧進への結縁は、個人では施主となれない庶民にとって格好の行業であったこと、また、多くの修善により、大きな功德を得られると考えていた院や貴族には、一切経書写は最大の善業として行われたことなど、往生伝では、それ

その状況に見合った行業の積み方が示されていることを考察したい。

第一章 六往生伝における往生人と一切経

一 『日本往生極楽記』

『日本往生極楽記』は、慶滋保胤が中国の往生伝にならい、日本における浄土教思想の普及を目的に編纂したもので、成立は十世紀末である。序文では、国史や伝記、古老を訪ねて西方極楽に往生した日本人の伝を集成したものと語っている。また、源信が『往生要集』において高く評価しているように、本書にならい鎮源は『本朝法華験記』を撰述し、大江匡房は『続本朝往生伝』を編纂した。

本往生伝において一切経が登場するのは「一七 沙門空也」の一話のみである。

①沙門空也《関連要旨》（aは「出自・行業」、bは「臨終の様子」、cは「その他」）

a常に弥陀仏を唱え、世に阿弥陀聖と呼ばれた。市中において仏事をなしたので、市聖とも呼ばれた。道路を修繕し、橋を

架け、井戸を掘った。「播磨国揖保郡峰合寺に一切経ありて、数の年披閱せり。もし難義あれば、夢に金人ありて常に教へ」てくれた。その後、各地で修行、苦行をして靈験を現した。

b遷化の日には、浄衣を着け、香炉をささげて西方に向かい、端坐して亡くなった。

c文末において「上人来たりて後、（念仏を）自ら唱へ他をして唱へしめぬ。その後、世をあげて念仏を事とせり。誠にこれ上人の衆生を化度するの力なり」と述べてその功績を讃えている。

平安時代中期の遊行の聖空也（九〇三―九七二）は、本伝において紹介されているように、阿弥陀聖・市聖とも称され、念仏をとなえて浄土教の民間普及に貢献したとされる。また『空也誄』によると、そればかりではなく、比叡山で受戒した後は貴族との交流を深め、その帰依を受けて造像・写経・寺院建立に活躍した。そして、自身創建の西光寺（後の六波羅蜜寺）において七十歳で没した。⁽²⁾

二 『続本朝往生伝』

『続本朝往生伝』は、大江匡房が『日本往生極楽記』を継いで撰述した。成立は十二世紀初頭である。序によると『日本往生極楽記』成立から百余年を経て、身分の低い者や朝野を訪ねて、遺漏や以後の往生人の伝を収集して編纂したとのことである。

本往生伝において一切経が関連するのは「四二 源忠遠妻」の一話である。

② 源忠遠妻《関連要旨》

a 源忠遠の妻は源教の孫である。年少の頃から慈悲心があり、喜怒を表さなかった。夫の忠遠に従い太宰府に下向した。

b 康和三年（一一〇一）産後に逝去した。臨終の時、正念に安住して、念仏は乱れず、梅のような異香がすると語った。

c 没後、その母が夢中で妻に往生の場所を問うと、「諸菩薩のなかにおり、みな大いに歓喜している」と答えた。また、師僧であつた覚厳が没後託生の所を示せと『観無量寿経』を読誦したところ、「今日の読経甚だもて可へり。なほ乞ふらくは、我がために重ねて四十八遍誦せよ。必ず生を上品に転ずべし」といい、今の住所を問うと、中品下生だと答えた。ま

た、ある人は夢に、この女が菩薩の装束を着けて、太宰府安楽寺の一切経会のなかにいるのを見た。

源忠遠妻の伝記については詳らかでない。また、夫である源忠遠についても不明であるが、祖父の源教は嵯峨源氏の流れをくみ、歌人として知られた順の孫として生まれ、従五位下武蔵守であつた。⁽³⁾

三 『拾遺往生伝』

『拾遺往生伝』は三善為康により十一世紀末期から十二世紀初頭にかけて撰述された。序によると『続本朝往生伝』をついで、それに漏れた古今の往生人について記したものである。全三卷あるが、各序によると上巻が書き終えられた後に、国史別伝や京畿辺外などから得られた往生の話を書き継いで中・下巻が完成した。

先の二往生伝の行業は、念仏や法華経の読誦・書写が中心であつたが、『拾遺往生伝』以降、造寺造仏、一切経や大般若経・五部大乘経など大部の經典の書写や講経の開講など多種多様な善業が行われている。

本往生伝において一切経が登場するのは上巻「四 内供奉安恵」と同巻「二〇 経暹上人」の二話である。

③内供奉安恵《関連要旨》

a 延暦寺の座主内供奉安恵は、幼い頃から聡敏で、七歳の時、下野・小野の山寺の大法師広智に師事した。広智は安恵の器量をみこんで延暦寺の最澄につかせ、最澄は自ら止観・真言を授けた。大師入滅後、円仁に従い毘盧遮那・孔雀等の経を習読した。天長四年（八二七）及第得度して、紀年の間、「三部の念誦、四種三昧、一切経等を修習」した。承和十一年（八四四）、出羽講師となり山を出て赴任した。この時、郡内の道俗は法相宗を学んでおり、天台宗を知らなかったが、安恵が入って以降、みな法相宗をすてて、天台宗に帰依した。貞観八年（八六六）太政官の牒により、天台座主は真言・止観兼学の者を任ずるとされたが、安恵は適任であった。b 貞観年十年（八六八）に奄然として氣絶えた。一晚を経て遺体を見ると左手は与願印、右手は宝印を結んでいた。

安恵（七九四？―八六八）は河内大県郡大貊氏の出身で、比叡山において学び、その後、出羽国講師となった。承和十三年（八四六）仁明天皇が建てた延暦寺定心院の十禅師、貞観四年（八六二）三月内供奉十禅師、貞観六年（八六四）一月に円仁が没すると天台座主四世となった。著書には『顕法華義鈔』『即身成仏義』などがある。

④経暹上人伝・慈応《関連要旨》

c 多武峰安養坊の住僧であった経暹は、寛治七年（一〇九三）に入滅した。その後、多くの人が経暹往生の夢をみた。弟子の慈応上人は、一切経の料紙を求めるために但州へ下向していた時、夢で地藏に引導されて、極楽に往生した経暹に会った。慈応は師に仕えるために極楽に留まりたいと言ったが、経暹は早く帰ることをすすめ、四十一日後にこの地に来ることを伝えた。

慈応は嘉保三年（一〇九六）に行われた金峯山奉納一切経書写の勸進聖人である。⁽⁴⁾ 師の経暹は多武峰安養坊に住み、寺内に結縁灌頂のための灌頂堂を建立している。⁽⁵⁾ 両者とも詳細な行状は不明である。

四 『後拾遺往生伝』

『後拾遺往生伝』は『拾遺往生伝』と同じく三善為康によって編纂された。上巻の序によると『拾遺往生伝』に引き続き、往生の伝を集めることにより、来世の知遇の縁となすこと、そして、この記をそしめる人も誉める人も同じ功德が得られることを願って編纂された。『拾遺往生伝』成立以後（保安四年（一一三三）頃から為康が亡くなる保延五年（一一三九）までに成

立した。

一切経が登場するのは、中巻「四 沙門西法」、下巻「二 参議左大弁為隆」、同巻「七 文章博士行盛」の三話である。

⑤ 沙門西法《関連要旨》

a もと俗人であった。壮年に道心をおこし、にわか出家した以降、衣服を整えず、居所を定めず、破壊された堂舎の修理や、病や飢えた人々の養育を行った。また善知識に勧めて「一切経を書き」写した。その他の善事はくわしく書くいとまがないほど多かった。

b 大治元年（一一二六）仲秋の頃に発病してわずかに平癒し、死期をあらかじめ知った。祇園寺東峰將軍墓南側の雑草をはらい、にわか草堂を作った。九月二十三日にもって僧徒に勧めて法花懺法を行い、弥陀念仏を修せさせた。上人は高声に念仏して、しばらくして亡くなった。その時、草堂のなかに異香が発した。

西法の詳しい出自や行状は不明である。伝から考えると寺院の修繕や困窮者の救済、經典の書写勸進を行った遊行の聖であることがわかる。その活動は空也と共通する点が多い。

⑥ 参議左大弁為隆《関連要旨》

a 少年の頃から仏法に帰依し、栄利を祈る一方で菩提を求めた。処々の名山靈寺を訪れ、四天王像を安置し、不断の供養法を修した。賀茂社に経藏を建て、金字大般若経と四天王像を奉安し、諷誦を開演、また七宝塔を造った。熊野宝前では金字妙典を安置して開講供養した。さらに「一切経を書写す。外題は自ら書き、他筆を交えず。すなわち春日社裏において、法藏を建立し、安置供養した」。毎日、唯識論を講じ、ながく退転することはない。また、氏寺勸修寺の裏に二蓋花堂と僧房を建立し、丈六の延命菩薩像を奉安して秘密の壇を置き、長日供養法を修せさせた。その他、仏像を数百体造り、堂塔を数十字建て、香花燈明の供養などを行って熏習を積んだ。行年五十年以後、さらに道心に住み、禁斷殺生し、受戒し、滅罪の真言を唱え、法花懺法をした。そして、智徳を請い、教法を問い談じ、知識の約をなし、臨終の儀を契った。

b 大治五年（一一三〇）八月に数日病悩して辞職し、ひとえに仏事を勤めた。九月八日に出家受戒した。僧侶と不断に声を同じくし、念仏合殺した。そして、善知識とあい、平生の願いどおり、正念に安住し、居ながらにして逝去した。部屋に奇瑞が現れ、僧は為隆が往生人だと思った。

c 没後、藤原宗友がその恩容をしたい、為隆の墳墓の前で落涙

し、一句の詩を詠んだ。

藤原為隆（一〇七〇―一一三〇）は、平安時代後期の公卿である。藤原師実・師通親子の家司、白河院の別当を務めた藤原為房の長男として生まれ、弟には院の近臣である顕隆がいる。藏人、左中弁、勸学院別当等を経て、保安三年（一一二二）参議に任じられ、以後、讃岐権守、周防権守を兼ね、従三位まで進んだ。また、藤原師通・忠実・忠実室源師子の家司も務めた。

⑦文章博士行盛《関連要旨》

a 代々文士の家に生まれ、名儒として知られた。柔和で実直であつた。「一切経を書写」し、一千日の講経を修した。その間、善業は注記することができないほど数多あつた。

b 近年三箇年病悩し、長承三年（一一三四）十一月十九日に危急に及び、二十二日に辞職し、出家受戒した。臨終の時、衆僧を請い、教法を受持し、仏号を称念して、静寂のなかで卒去した。

c 子息は夢に幡蓋を擎げて行盛を迎える二童子を見た。家僕は夢に行盛が黄蓮華のなかに生まれたのを見た。

藤原行盛（一〇七四―一一三四）は文書博士、行家の子とし

て生まれた。曾祖父広業は一条、三条、後朱雀天皇三代の侍読として仕え、祖父家経や父は行盛と同じく文書博士であると共に歌人でもあつた。⁶文章得業生を経て、勘解由次官、式部大輔、左衛門権佐に任じられ、摂津守も兼ねていた。また、藤原忠実の家司も務めている。彼の和歌や詩文は『中右記部類紙背漢詩集』『和漢兼作集』『金葉集』等に収録されている。行盛の伝は『本朝新修往生伝』一七にも収録されており後述する。

五 『三外往生記』

『三外往生記』は沙弥蓮禪の編纂である。編纂時期は所収の往生人の没年から保延五年（一一三九）の頃と思われる。序では慶滋保胤・大江匡房・三善為康の撰述した往生伝から漏れた往生人を収録することで、その功德により一切衆生と共に九品の浄土へ往生することを願っている。

本往生伝において一切経が登場するのは「三三 良忍上人」である。

⑧良忍上人《関連要旨》

a 良忍は延暦寺東塔常行堂衆であつた。一千日間無動寺に参詣して、名聞を忘れているようであつたが、これは菩提心を祈るためであつた。永く衆と交わることを絶ち、大原に小庵を

かまえて止住した。十二時に三昧行を修し、年来怠ることがなかった。兼ねて「一切の経論を披閲した」。そして堂舎・仏像を造立し、多年練行した。

c 天承二年（一一三二）二月に遷化した後、大原律師覚嚴の夢に現れて、自分の本意を過ぎ上品上生にある、これは「融通念仏の力」だと告げた。

良忍は幼くして比叡山に登り、大原別所で来迎院と浄蓮華院を建立したとされる。融通念仏は永久五年（一一一七）に始めたとされ、天台声明を大成させたともいわれる。良忍伝は往生伝の他、『古事談』三、『十訓抄』下、『古今著聞集』二一、『元亨釈書』一一等、多くの説話にも取り上げられた。⁽⁷⁾

本伝では「一切経」ではなく「一切経論」と記している。これはすべての経論を意味すると考える。往生伝の一切経は仏教の聖典の総称を意味している。小稿では本伝の「一切経論」を他の往生伝の「一切経」と同意と考えて紹介した。

六 『本朝新修往生伝』

『本朝新修往生伝』は藤原宗友により仁平元年（一一五一）に撰述された。序によると『日本往生極楽記』から『後拾遺往生伝』まで往生伝が書き継がれてきたが、近年にも往生人があ

るのでこれを書き記したという。

一切経に関連する伝は「一七 文章博士藤原行盛」「二七 沙門運覚」「三〇 式部大輔藤原敦光」の三例である。

⑨ 文章博士藤原行盛《関連要旨》

a 行盛は儒行にすぐれていた。人柄は実直で、内には仏法に帰依しており、「一切経を書き」写し、丈六像を造像した。これらは「けだし菩提のため」であった。三年間病に臥し、ひとえに死後善処に生まれることを祈った。一心に誠をあらわし、千座講を行った。

b 長承三年（一一三四）十一月に摂津守を辞職して出家した。

臨終の時、善知識にあい、衆僧と弥陀仏を唱えて亡くなった。c 没後、男と家僕の夢に往生の奇瑞が現れた。

前述した『後拾遺往生伝』行盛伝と本伝は、話の概略は同じであるが、(1) 本伝では仏法に帰依していたとの文言が加えられ、(2) 一切経書写は「菩提のため」だとすること、(3) 丈六像造仏の記事が加えられていること、(4) 前の伝では一切経書写の直後にあった「一千日の講経」が三年病に臥してからひとえに後生善処を祈り「千座講」を行い仏道に資したとしていること、(5) 危急に及び辞職、出家したのは三日前と書

かれていたことは十一月と月のみ記していること、(6) 臨終の時に「衆僧」が囑請されたことが「善知識」に値うとなっていること、(7) 享年が六十四歳とあったが本伝では六十五歳となっている点が異なっている。

⑩沙門運覚《関連要旨》

a 運覚は醍醐寺住侶であり阿闍梨聖賢の弟子であった。少年の時、三論、真言を学んだ。「如来滅後二千余年、正像の時が過ぎ、遺教滅せんと欲す。当にこの時、宜しく仏法を弘むべし」と願い、「一切経を自ら書き」写し、その数は三十年間で二千卷になろうとしていた。また、三時行業を多年怠らなかつた。

b 康治二年(一一四三)二月、つねのように行法を行った後、衣服等を整え、同行人を招集して、命終の時が来たので自分のために尊勝陀羅尼を誦し、また、阿弥陀宝号を唱えて浄土行儀を助護するよう語った。そして、仏舎利の前に座を移して手に定印を結んで亡くなった。

運覚(？―一一四三)は字を行乗といい、式部上人とも呼ばれた。醍醐寺の住僧であり、保安二年(一一二一)三寶院で伝法灌頂を受けている。⁽⁸⁾

⑪式部大輔藤原敦光《関連要旨》

a 敦光は多くの優れた詩句を作り、佳句は多くの人々に詠われた。新院(鳥羽院)には侍読として仕えた。

天養元年(一一四四)四月に発病し、出家した。数日後、夢に焰魔王から臣となるよう召喚されたが、出家していたために返された。その時、冥官は敦光の生所は決まっていなかった。その後、三宝に帰依してもつばら後生を祈った。持戒念力は平生よりしました。別に衆僧を率いて三十講を行わせた。晩夕には懺悔法を行い、日夜念仏の功を積んだ。また、子息に自分は「一切経書写の願あり。その中の五部大乘、まさにもつて終功せんとす」といい、残りの書写を子息に依頼した。一生の間、仏法を深く信じ、日ごとに法花経を転読した数は二千部に及んだ。その他の造仏写経は計り知れない。

b 臨終の時、善知識(中川聖)にあり、八斎戒を受けた。ついで光明真言を受誦した。また人に声を出させて伽陀を誦させた。そして、手に定印を結んで亡くなった。

c その後、僕従の夢に敦光が往生したことがみられた。

藤原敦光(一〇六三―一一四四)は平安時代後期に活躍した学者である。文章博士を務めた藤原明衡の子として生まれたが、幼くして父を失い兄敦基の養子となった。文章得業生を経て、

大内記、文章博士、式部大輔、右京大夫等を歴任した。生涯に多くの皇子や皇女の名や年号などの勘申を行った。また、白河、鳥羽院をはじめ貴顕の人々の願文を作成している。優れた漢詩を数多く残し、『中右記部類紙背漢詩集』『本朝無題詩』『本朝続文粹』等に収録されている。八十二歳という長寿を全うしたが、活躍は四十歳代以降であった。官人としての自らの境遇に不満を抱き、その嘆きを詠んだものや、昇進を願って奏上した作品も残されている。大治五年（一一三〇）に亡くなった娘の姫子は往生人として『後拾遺往生伝』『三外往生記』に収録されている。

以上、一切経に関わる往生人の伝を紹介した。一切経との関わりは「披閲・修習」「勸進」「書写」「その他」に大別できる。次章では、分類した各伝を詳しく考察していき、往生人の生涯のなかでの一切経の意義を明らかにしていきたい。

第二章 往生人による一切経の披閲・修習、 勸進、書写、その他

一 披閲・修習

一切経の披閲・修習について書かれた往生人は『日本往生極楽記』空也伝、『拾遺往生伝』安恵伝、『三外往生記』良忍伝の三伝である。空也、安恵伝は僧侶の修学として、良忍伝は遁世僧の修学として説かれているという違いがある。

①空也伝（『日本往生極楽記』）

『日本往生極楽記』に掲載される往生人のなかで、一切経を披閲したと書かれているのは空也だけである。この伝では、空也は阿弥陀聖・市聖と呼ばれ市井で活動する宗教者ではあるが、一切経を学んで理解した学識がある聖として、人々に念仏を勧めた「上人」であると語られているのである。

空也の活動は、中世の説話集にもしばしば取り上げられている。その一部は、源為憲が空也の一周忌の頃に著した『空也誄』を基本としている。本空也伝における一切経に関する記述も『空也誄』によるが、『空也誄』では各地での修行の一つとして以下のように記している。

播磨国揖保郡有^二峯合寺^一、有^二一切経論^一。上人住^二彼道場^一、披^二閱數年^一。若有^二疑滯^一、夢有^二金人^一、常教^二文義^一。覺後問^二智行之倫^一、果而如^レ夢⁽¹⁰⁾。

『空也誄』では「一切経論」とするところを本伝では「一切経」と記す点が異なる。

また『六波羅蜜寺縁起』では、尾州国分寺で剃髪の後、以下のように記す。

播磨国揖保郡峯合寺有^二一切経論^一。上人往而披閱。料簡之義理自通顯。談^二智行之徒^一、蜜得^二夢想之訓^一。

ここでは料簡の義理が自ずと顯らかとなり、夢想を得て学識ある智行の僧と対等に議論することができたとする。

このように『空也誄』『日本往生極樂記』『六波羅蜜寺縁起』では、空也の前半生の事績として、一切経披閱の記事が取り上げられているが、平安時代末期から鎌倉時代前期に編纂された説話集のなかの空也伝には見られず、十三世紀以降に編纂された『阿婆縛抄明匠等略伝記』『元亨釈書』に再び取り上げられている⁽¹¹⁾。

『阿婆縛抄明匠等略伝記』空也伝は、冒頭に一切経披閱を挙げてゐる。それに続いて靈験や勸進活動等がつづいており、まず、一切経を学んでその後の活動に至ったことを印象づけている。一切経修習の記事の文言は『空也誄』と同文である。

『元亨釈書』一四⁽¹³⁾には、冒頭に各地での道路の修繕や架橋、井戸の開削等をあげ、常に弥陀号を唱えていたのでその井戸は阿弥陀井と呼ばれたことを紹介。国分寺で剃髪、京都で阿弥陀念仏を勧化して、六波羅蜜寺をつくった後、峯合寺で「看^二大藏^一。有^二不^レ通處^一、夢金人來說」と書かれている。そして靈験譚、大般若経供養等の記事へとつづく。

この二書の伝は『空也誄』をもとに作られたと考えられるが、前者では阿弥陀聖ではなく天台僧としてとらえられていること⁽¹⁴⁾、後者では盗人に遇った工人が空也に教えられたとおり弥陀を念じて難を免れた話（『日本往生極樂記』）や松尾明神の救済譚（『古事談』『発心集』）等の『空也誄』にはない靈験譚も加えられている。これらは、空也の没後、人々のあいだで語り継がれた空也伝承である。

二つの空也伝は、それまでの空也伝を編集して新たに創造された空也像である。当時の知識人である二伝の撰者は、歴史に残る優れた僧として空也を取り上げた。その名僧空也の事績として改めて一切経披閱の記事を取り上げている。

③ 安恵伝（『拾遺往生伝』）

安恵伝は『拾遺往生伝』が最も古く、他には鎌倉時代に編纂された『天台座主記』『阿婆縛抄明匠等略伝記』『元亨釈書』等

がある。

しかし、『天台座主記』安恵伝⁽¹⁵⁾には、一切経修習は記されていない。また、出羽講師になったこと、始めに最澄を師としたことには触れず、「慈覚大師入室弟子」とする。

『阿婆縛抄明匠等略伝記』下の安恵伝は、『拾遺往生伝』を簡略化したものとなっている。一切経の修習は伝教大師没後、慈覚大師に随い「一切経論之旨窮其辺底。半滿教門之義盡其根帶」と記す。しかし、前書と同じく出羽講師の記事はない。

『元亨釈書』二は『阿婆縛抄明匠等略伝記』と同じく『拾遺往生伝』をもとに作られたものと考えられる。しかし、『元亨釈書』では「三部念誦・四種三昧」を修したことはあげられているが、一切経の修習は書かれていない。末尾には「賛に曰く、業は勤むるに精し、是れ笈を負ふの事なり。四師（勤操、護命、道雄、安恵）、宗を異にすれども其の勤むるに精しきことは同じ。しかのみならず、（勤）操の靈、（護）命の弁、（道）雄の興、（安）慧の博なる、豈に夫れ辺幅ならんや」と、安恵の博い学識を評価している。

『拾遺往生伝』の安恵伝では、貞観八年（八六八）の太政官の牒に、「真言・止観兼学の者をもて座主に補すること、立てて永式となした」ことをあげて、すでに二年前の貞観六年に座

主となっていた安恵は「已にその撰に当りぬ」とする⁽¹⁶⁾。初期の安恵伝であるこの伝において、すでに安恵は真言・止観両方を兼ね備えた座主としてとらえられていた。

前述のとおり、一切経の記述は全ての安恵伝に見られない。しかし、多くの伝において安恵は、最澄または円仁などから止観・真言や三部の念誦、四種三昧等を学んだことが記されており、天台における学僧としての正統性、優秀さが強調されていた。一方、死後の奇瑞は全ての伝に共通しており、往生人としての安恵像が浸透していたことがうかがえる。

『拾遺往生伝』安恵伝では、安恵が一切経等を修習した博識の僧であり、その学識により人々の帰依を受け、往生を遂げていた。安恵伝のように一切経修習の裏付けにより人々を教化して、往生を遂げた僧の伝記は、生前、一切経を数度読んだと説かれた法然伝に代表されるような、祖師の修学譚へと展開するものと考えられる。

⑧良忍伝（『三外往生記』）

『三外往生記』のなかで一切経に関する記述があるのは良忍伝だけである。本往生伝の往生人はほとんどが出家者であり、多くは天台の学僧である。その他は南都、高野山や醍醐、吉野等の諸山の僧であり、同じく学僧が多い⁽¹⁷⁾。そのなかで良忍伝の

みに一切経論の披閱があるのはどのような意味があるのだろうか。

良忍の一切経の披閱は、延暦寺東塔常行堂衆の後で、大原別所移住後であり、職を辞し、往生のために行を積んだ時期であった。つまり、良忍の一切経披閱は学僧の教養として行われたものではなく、往生について学ぶことを目的に行われたのである。一切経披閱は三昧行、堂舎・仏像の造営と並んであげられている。これらの行業は往生を目的としたものである。隠遁して、行業を積み、上品上生を遂げるこの姿は、往生伝のなかでは理想の往生人といえよう。

他の良忍伝をみてみたい。『後拾遺往生伝』下巻「三 沙門良仁」伝では、良仁は比叡山の住侶であり、早くに堂衆となつて久しく寺役を勤め、頽暮の年に及んで大原山に隠居、永く世営を断つてひとえに往生を願い、妙経読誦、念仏、三時行法、如法経書写を行うと共に、撚指供養、睡眠を断つ等の苦行も行った。正念に安住して命終し、音楽が流れた。この伝には一切経披閱の記事、融通念仏による往生には触れられていない。

承久二年(一二二〇)⁽¹⁸⁾以前に増補されたとされる『後拾遺往生伝』中巻一九の良忍⁽¹⁹⁾伝によると、良忍は「首楞嚴院の禅徒」とされ、中年以後、大原へ移住してひとえに往生を願い、常に仏前に対して燈明の光を消し、極樂を觀じていて、その他の行

業は知られていなかった。しかしある時、舎弟の堯賢に、年来、白毫觀を修し、黒業の罪を懺していたことを密かに告げた。また、この伝では臨終時に仏像の手に五色の糸をかけて念仏した様子等が詳しく描かれている。

『後拾遺往生伝』『三外往生記』の良忍(仁)は、自身の往生を願って修行する隠遁の僧であり、後世、説かれるような融通念仏を勧めたことは書かれていない。

一方、『古今著聞集』『広疑瑞決集』『元亨釈書』の良忍は、往生を願って二十代で大原へ遁世して修行していたが、仏の誨示を受けて融通念仏を勧める上人となっている。

『古今著聞集』二(五三)には一切経披閱の記事はない。『広疑瑞決集』⁽¹⁹⁾三では、念仏、一切経の披閱、造寺造仏を行っていた良忍に、阿弥陀仏は「順次往生の正業をしらず、速に往生を遂げんと思はば、すべからく融通念仏を行うべし」とそれまでの行業を否定する。

また、『元亨釈書』一一では一切経披閱の記事をあげず、毘沙門天に融通念仏を勧められているが、他の行業を否定していない。そして、良忍が如来藏という経藏を建てて「大藏の経律論」をおいていたことを記している。本書では冒頭に、良忍は天台の教えを良質に、密灌を永意にうけたとあげ、融通念仏⁽²⁰⁾を勧める天台密教の学識ある名僧として描かれている。如来藏も

その学識を裏付ける要素となっているのである。

一切経修習は、空也、安恵両伝では修行の一部として説かれ、人々に仏法をひろめて往生した僧の学識の深さを表していた。

一方、良忍伝では通世僧が一切経をひらき見て、往生を研究していた。つまり、往生を願う者の修学として一切経披閱が説かれていた。

往生伝の編纂時期が下ると往生人の一切経修習は見られなくなる。また、天台座主や公請を勤めた僧なども減少している。それに比例して往生の僧は通世的で、その修習は詳しく書かれず、大量の念仏や法華経読誦を行うなど数量を重視した行業となっている。

一切経の披閱・修習は平安時代末には往生人の行業として強調されていなかった。しかし、鎌倉時代の高僧伝で僧の豊かな学識の象徴として再び取り上げられるようになっていたのである。

二 勸 進

往生伝には二人の一切経勸進聖の伝がある。共に三善為康の撰述である。彼が選んだのは、いずれも市井で活躍する遊行の僧であった。編纂初期の往生伝において念仏や仏事を通じて「勸進」する僧はいたが、經典書写をして「勸進」する者は少

なく、その姿が見られるようになるのは『拾遺往生伝』以降である。これは經典書写聖が増加した時期であり、往生伝に時代が反映されていることがわかる。

④ 慈応伝（『拾遺往生伝』）

『金峯山草創記』によると、慈応は寛治八年（一〇九四）から翌年にかけて三度「蔵王御示現」があつたため一切経書写を行つたとされる。⁽²²⁾

この書写事業は貴族も注目しており、『後一條師通記』によると嘉保三年（一〇九六）三月十八日は「一日一切経書写之後、於本所奉供養之日也」と記しており、一切経が一日間で書写供養されたことがわかる。師通はこの書写に参加しており「六十卷華嚴経外題」を自ら書いている。その功德は「華嚴論云、外題七字一触三耳目、一奉書外題、四罪之獄不入墜」であり、これは延真律師が語つたと説明している。

また『中右記』同年三月十八日条によると、

今日京中上下万人、一日之中書写一切経。是有二聖人。得夢想告、進催人々於各家々令書写。則供養了、送聖人許。

とその様子を記している。そして、これは「依爲大善根、聊所記置也」と書いていることから、書写事業は善根を積むこ

とであると考られていたことがわかる。このように当時、經典書写の功德が僧に語られ、人々に信じられ、こぞつて結縁されていたのである。

また、『中右記』は承徳二年（一〇九八）三月二十一日にこの一切経が金峯山に送られたことを書き留めている。それによると慈応は一切経書写後、法成寺に居住して、寺中の一切経により一切経を校訂していた。そして、二十一日に大殿（藤原師実）や左大将（藤原忠実）から人夫と浄衣を給わり一切経を金峯山へと送っており、それに京都中の人々が「成市結縁」している。

この一切経書写の背景として、寛治七年（一〇九三）九月二十日に蔵王堂が炎上したことがあげられる。⁽²³⁾ そのおり、本尊の金剛蔵王像は焼失しなかった。十月二日には少史小野政孝が遣わされ、十五日には僉議で修造されることが決まった。三年後の嘉保三年（一〇九六）六月には蔵王堂が完成、七月十五日には堂供養が行われることが決められた。⁽²⁴⁾

慈応の一切経書写勸進は堂供養の四ヵ月前にあたることから、この書写も復興事業の一環と考えられる。約十年後の長治三年（一一〇六）内大臣源雅実により梵鐘一口が施入されたが、その施入状⁽²⁵⁾によると「仏像経巻、堂舎庖浴、炎上之後、重復旧基」と述べており、経巻も復旧の対象であったことがわかる。

ところで金峯山への納経は寛弘四年（一〇〇七）、藤原道長の埋経が有名であり、慈応勸進一切経に結縁した藤原師通も埋経している。⁽²⁶⁾ 慈応の勸進成就の背景には、金峯山に対する信仰の隆盛があつたことはいままでもない。慈応の勸進は、金峯山に対する信仰を広く庶民に浸透させたことに加え、人々に霊地における一切経の必要性を伝え、それに結縁することの功德を人々に説き示した点にも意義があるといえる。

⑤ 西法伝（『後拾遺往生伝』）

西法にとつての一切経書写勸進は生前の善業を代表するものであつた。往生伝における一切経書写には、勸進聖が中心となつて知識に勧めて行う場合と、自ら発願して行う場合がある。前者の例としては本伝と前述の『拾遺往生伝』経還伝・慈応の例がある。後者は次節に述べる貴族たちの書写である。聖による一切経書写勸進は白河院の時期（一〇八六―一一二九）より増加して、鳥羽院の頃（一一二九―一一五六）、その比率はさらに上昇した。⁽²⁸⁾ 慈応の例は白河院の前期の例であり、西法の例は白河期の末に当たる。鳥羽期最盛期の事例が富士上人末代の書写勸進である。

久安五年（一一四九）、富士上人末代は人々に勧めて富士山埋経のための一切経書写を行った。⁽²⁹⁾ 『本朝世紀』四月十六日に

よると、この書写には「関東の民庶」から鳥羽院まで、貴賤を問わず多くの人々が参加している。この時に作られた「鳥羽天皇写『大般若経』発願文」⁽³⁰⁾によると、鳥羽院は結縁のため、大般若経を諸人に割りあてて書写させている。それは「且為就二世之願求、且為致一天之靜謐」であつた。さらに、如法一切経は倭漢ではいまだ行われておらず、自分はその功德を渴仰し、その慧業を増進することで「廻知往劫機縁之令然、豈疑当生菩提之可証」とし、自身の菩提を願つたのである。そして、文末に「凡厥助成之輩、見聞之衆、永離惡趣、皆到淨利。發願如件」として、結縁の人々の往生を願つて文を結んでいる。『本朝世紀』ではこの事業を「莫大之善根。諸天定歎喜歟」と記している。

この一切経は、書写の後、五月十三日に仏頂堂ならびに東山七条の大貳清隆堂において盛大な供養が営まれ、結縁の道俗が雲霞のごとく集まつた。大般若経書写参加の人名帳は院宣により、能書家である藤原定信が書いている。⁽³¹⁾

『後拾遺往生伝』西法伝では、無名の遊行聖が一切経書写の勸進聖を務め、往生を遂げている。この時期は一切経の書写勸進が増加した時期であり、多くの人々が結縁していた。この伝では人々のなかで、一切経書写に結縁することが往生の行業として定着していたことを読み取ることができる。

西法は市井で活動した遊行の聖であり、富士上人末代は富士山で修行する一上人である。また、前述の慈応も遊行聖と思われる。これら三人は、いわば無名の僧である。その彼らがこのような大規模な事業を行えた背景として、人々が書写經典へ結縁することに功德があることを信じていたことがあげられる。その背景に空也や皮聖行円など、平安時代中期に活躍した聖たちの活動を見逃すことはできない。

やがて、このような大規模な結縁事業の普及が、十二世紀末期から行われた東大寺復興を推進した大勸進俊乗房重源の活動を成功へと導いたのである。行業としての一切経の価値が広く認められていくなかで、往生伝の中にも一切経が語られ、その勸進聖の活動も往生伝の中に収められるようになったことが指摘できるのである。

三 書 写

往生人と一切経の関わりのなかで最も多いのが書写である。書写は施主となつた例、自筆書写した例とがある。一切経をはじめ經典の書写は、『日本往生極樂記』『続本朝往生伝』など初期の往生伝には見られず、『拾遺往生伝』以後で増加してくる。これは院政期において、經典書写が往生の行業として確立してきたことを示している(表1参照)。

表1 往生伝における経典書写

経典名 往生伝名	一切 経	法 華 経	大 般 若 経	五 部 大 乘 経	華 嚴 経	最 勝 王 経	如 法 経	不 明	合 計
『日本往生極楽記』	0	2	0	0	0	0	0	0	2
『続本朝往生伝』	0	1	0	0	0	0	0	1	2
『拾遺往生伝』	1	9	3	3	0	1	2	1	20
『後拾遺往生伝』	3	6	0	0	1	0	3	4	17
『三外往生記』	0	1	0	0	0	0	0	0	1
『本朝新修往生伝』	3	1	0	1	0	0	2	1	8
合 計	7	20	3	4	1	1	7	7	50

⑥藤原為隆伝（『後拾遺往生伝』）

本伝によると為隆は少年の頃から三宝に帰依しており、行った善業は莫大な量であった。一切経もその一つとして行われている。また、各地の寺院に四天王像を奉納しており、護法祈願の意図がうかがえる。彼に財力があつたことは、後述する彼の持仏堂からもうかがえる。しかし、彼が実際に一切経を書写したことは確認できない。

為隆の日記『永昌記』には、他者が行った一切経書写供養の

記事がある。嘉承元年（一一〇六）九月二日条では因幡守隆時の堂宇で行われた東名寺上人の一切経供養について記している。そこでは導師や咒願のこと、百口の僧侶等をまねいて供養したことや、その一切経がこの六カ年偏えに知識をもつて書写されたこと、これは聖人の勧めであつたこと、僧侶等は布施を受け取らなかつたことなど、供養にまつわる話があげられている。

また、天仁三年（一一一〇）三月九日から十一日までの条には、白河上皇が法勝寺で行つた金泥一切経供養の記事がある。供養の二日前からの上皇や藤原忠実の動向、雨による供養の遅延の様子も記されている。⁽³²⁾

為隆の弟で勸修寺流の祖である僧の寛信（一〇八五―一一五三）も一切経書写を行つており、それは長承二年（一一三三）に亡くなつた母の「為_レ訪_二彼菩提_一、発_二一切経書写大願_一」したのであつた。⁽³³⁾

一切経の場合、全てを自筆書写した例は少なく、六往生伝のなかでも、外題は為隆伝のみ、全ての書写を試みたのは後述する運覚だけである。為隆の一切経は自ら外題を書き、氏神である春日社へ安置・供養されている。その目的は一切経の奉納により氏神の神威を増すことで一族の繁栄を祈願をしたものである。

春日社では『興福寺略年代記』によると寛治四年（一一〇九

○十一月晦日に一切経転読が始められた。⁽³⁴⁾『後二条師通記』には、その翌年の一切経転読を記している。⁽³⁵⁾また、康和二年(一一〇〇)に白河上皇により一切経読誦が行われた。⁽³⁶⁾その後、永久五年(一一一七)に藤原忠実が叔父である興福寺別当の大僧正覚信のもとで一切経を書写させ、書写ができるに随い供養して塔に置いた。⁽³⁷⁾これは忠実存命中には出来あがらず、治承二年(一一七八)七月十五日に孫の藤原基実の夫人・平盛子が完成させ、春日社経蔵に納めた。⁽³⁸⁾

仁平元年(一一五一)十月七日には前宮内大輔藤原定信が自筆一切経を春日社において供養し、興福寺経蔵に安置している(定信一切経については後述)。このように春日社では院政期よりしばしば一切経が奉納され、その多くは春日社を氏神とする藤原氏関係者からであった。現在、為隆の一切経は確認されていないが、実際に納められていたとすれば春日社では早い時期の施入例である。

春日社は白河院の一切経供養以来、長治元年(一一〇四)四月二十二日には遷宮により御社宝殿四字が造営され、永久四年(一一一六)三月六日には忠実による五重塔(西御塔)が落慶する等、十一世紀末から十二世紀前半にかけて、境内の建物等が次々と整備されていた。

また、その後の保延二年(一一三六)九月十七日には初めて

若宮祭が行われ、保延六年(一一四〇)十月二十九日には鳥羽上皇御願の塔(東御塔)が落慶する等、春日社への信仰が隆盛していく様子を見ることが出来る。為隆の一切経施入は、春日信仰が高まっていく流れの中で行われているのである。⁽⁴¹⁾

『中右記』には、為隆の記事が多々あり、その実直な働きぶりがうかがえる。大治二年(一一二七)十月十七日条には為隆の持仏堂供養の記事がある。池や山が配され、三間四面の丈六堂や懺法堂、迎講堂等がある仏堂の様子を宗忠は「風流絶妙」と賞賛している。この堂の諸仏は本伝の永昌坊の道場と一致する。また、同記大治五年(一一三〇)九月八日条には為隆薨去の記事がある。そこには享年と出自、職歴が書かれた後に、「数日病悩し、遂にもつて薨逝す。参議従三位勘解由長官なり」と記し、これも本伝の記事と一致する。

為隆は嘉承元年(一一〇六)から勸学院別当に任じられており、文人貴族たちと親しい間柄であった。本伝文末には『本朝新修往生伝』の撰者とおもわれる藤原宗友が、為隆の恩容を慕ったことが記されている。⁽⁴²⁾また、為隆の堂供養では、後述する往生人の藤原行盛が願文を執筆している。さらに、為隆の弟の朝隆は文章生の出身である。

本伝記の撰者である三善為康(一〇四九―一一三九)は、為隆と同時期に活動しており、為隆の行業も知っていたとおもわ

れる。

⑦藤原行盛伝（『後拾遺往生伝』）

行盛の生前の善業について一切経書写、一千日の講経を修すほかは「善業数多」と省略して書かれており、先の西法伝と共に一切経が当時、修善のなかでも特別な存在であったことがわかる。

行盛伝にあるように往生伝では、往生の行業として「講経」をひらくこと、それを聴聞することが勧められている。⁽⁴³⁾ 講経でたびたび講じられていたのは法華経であった。例えば『後拾遺往生伝』中巻「二〇 式部大輔敦光女姫子」伝によると、臨終後、親族の夢に現れた姫子は、浄土の宮殿の門の前に立ち、自分は万日の法花講を行った善根により往生する六角宣旨という人 wait していると話した。そして、「我在世の時、病痾を相い扶け、（法花講を）しばしば聴聞いたす。その縁により、この浄利に詣り行くべし」と語った。この伝では講経を行うこと、それを聴聞することは往生の要因となることが説かれている。⁽⁴⁴⁾

また、行盛伝の末には行盛の子息と家僕の相方の夢に往生の奇瑞が表われている。往生は仏教興隆を目的とした一切経の書写・講経の功德によるものと読みとることができよう。

行盛が実際に一切経書写を行ったか否かは定かではない。ま

た、彼が行った善業についても不明である。彼の動向は同時代に活躍した藤原宗忠の日記『中右記』に見ることができ。ここでは官吏としての記事が多いが、なかには春季仁王会の祝願文、白河院四十九日の願文作成等、法会の願文を執筆していたことが知られる。⁽⁴⁵⁾

本伝では「近年三箇年、病悩して、つねに沈む」とあるが、『中右記』には行盛が没する二年前から行盛の病悩の記事が表れている。⁽⁴⁶⁾ 亡くなる約半年前に撰津守に任じられている。本伝では「漸く危急に及ぶ、長承三年十一月十九日、廿二日乖くにより、勿ちに所職を辞し、出家受戒、臨終の時」と記し、数日間で病状が悪化して死去したことが読み取れる。同記では行盛が死亡した四日後に小除目の記事があり、住吉遷宮が近々行われるので、急いで撰津守となしたとして、新たに藤原顕遠が撰津守に任命されている。本伝では行盛の没年を六十四歳とするが、同記では六十一歳と異なっており、また、没後の瑞夢についても見あたらない。

撰者の三善為康は行盛と同時代を生きた人物であり、行盛の一切経書写を見聞していたことも推測される。史実は不明であるが、本伝撰述当時、往生人にとって一切経書写が善業を代表するものであることを物語っている。

⑨藤原行盛伝（『本朝新修往生伝』）

『後拾遺往生伝』行盛伝では出自、善業が挙げられ、病となつてから死までの時間的な経緯が説明され、記録的な記述となつてゐるのに対して、『本朝新修往生伝』ではもとより仏法に帰依していたことや、病となつて偏えに後生善処を祈つたこと、臨終において衆僧と数遍阿弥陀仏を念じて、声が止まり亡くなつたことなど、往生人にふさわしい描写となつてゐる。

行盛も行つた千座講は『本朝新修往生伝』「三五 入道参議平実親」伝にも見られる。実親は千日に限つて一乗（法華經）の講を行つたところ、「聴聞市をなし、功德は隣に有」つたとして、講經の意義を述べてゐる。

また、本伝では千座講と共に、菩提のために丈六仏が造られた記事が追加されている。往生伝では、丈六仏の造像が繰り返し説かれ、往生の行業として重要な位置を占めていた。⁽⁴⁷⁾ 往生の業因として知られた丈六仏造像、講の開講と並んで記された一切經書写は、往生の行業として高い価値が認められていたことがわかる。

『拾遺往生伝』以後の往生伝では、丈六仏のように大きな仏像と共に、一切經のような大部の經典の書写が行われていた。その後の『本朝新修往生伝』では、多量の念仏、經典書写、造像等、数量信仰に基づく行業が行われていた。これは往生人の

財力に應じて行われた行業である。

⑩運覚伝（『本朝新修往生伝』）

運覚伝における一切經書写の目的は仏法興隆にあつた。一切經書写の目的が勸進や自身の往生、一族繁栄にあつた前述の伝とは異つており、目的が多様化していることがうかがえる。

『本朝新修往生伝』「三一 大儒清原信俊」伝で、信俊は數十人の浄侶に如法經三十余部、法華經一千五百部を書写させ、各地の名山靈寺に送つた。それは「法久しく住し、流布し、演說せしめんがため」であつたことが書かれ、經典書写が仏法興隆の目的として行われ、それが善業であることが明確に説かれるようになつてゐる。

運覚の師とされた聖賢（一〇八三―一一四七）は、威儀師少別当賢円の子息であり、醍醐寺理性院開基賢覺の舍弟で、小野流の一つである金剛王院流を開いた真言僧である。天仁元年（一一〇八）醍醐寺無量光院において勝覺から伝法灌頂を受けた。弟子には源運、亮恵等がある。

運覚とその師の聖賢に伝法灌頂を受けた勝覺（一〇五三―一一二九）は、第十四世の醍醐寺座主で、三宝院の開山としても知られる。左大臣源俊房の子で、醍醐寺座主定賢の弟子となつた。応徳三年（一一〇八）に醍醐寺座主となり、永長元年（一

○九六）白河上皇落飾の際には戒師を務めた。その後、東大寺別当、東寺長者等に任じられた。付法の弟子には醍醐三流を立てた定海、聖賢、賢覚等がいる。また、往生人として『後拾遺往生伝』下巻七に収録されている。

運覚は、当時、醍醐寺でも優秀な学僧の近くに位置した僧侶であつた。この時期の醍醐寺は、白河上皇や、源俊房をはじめとする村上流源氏の帰依を受け、境内の諸堂・諸院が整備された時期でもあり、運覚は寺内の僧侶の修学の必需品である一切経をそろえるためにも、書写したのではないかと考えられる。

運覚は一切経を自ら書写しているが、数千巻にも及ぶ一切経書写は大事業であり、自筆で書き上げることは希であつた。当時、自筆一切経を完成させた人物として、藤原定信（一〇八八―？）⁽⁴⁸⁾があげられる。定信は藤原行成の子孫にあたり、能書家として知られる。二十三年間かけて一人で一切経を書写して、仁平元年（一一五一）十月七日、春日社宝前において供養した。その法会では、供養の導師を別当権僧正隆覚が務め、百僧が招請され、舞楽が演奏される盛大なものであり、院宮諸家から多くの贈物あつた。⁽⁵⁰⁾この一切経は、後に興福寺内に建立の経蔵に安置される予定であり、「定信現世遺三万代之名。當来免三途之苦」⁽⁵¹⁾訪和漢兩朝、未聞政勤者。」と『宇槐記抄』に書かれている。この記事から定信の一切経書写は、後世に名を残す偉

業というだけでなく、三途の苦を免れるほどの功德があると信じられていたことがわかる。

また、『古今著聞集』二一（五五）には後日談が語られている。左大臣藤原頼長のもとに参じた定信入道を、頼長は衣冠をただして礼拝し、「一切経を書きて供養を遂げたる人なり。仏と同じと拝せらる」と日記に記したという。⁽⁵²⁾一切経を自筆書写した者が尊崇されていたと語られていたことは興味深い。定信が世尊寺流の能筆であることを考えると、彼の經典書写は自分の才を生かした修善であり、善を尽くし美を尽くした仏への供物を作つて奉納していた当時の人々から見れば、さぞや行業としても功德のあるものと映つたことであろう。

①藤原敦光伝（『本朝新修往生伝』）

『本朝新修往生伝』の撰者である藤原宗友は、本伝の冒頭で、往生人の敦光は「朝の賢師、道の宗匠なり」と讃えるとともに、「天性廉直にして、財軽く才重し」とその性質を賛美している。本伝は天養元年（一一四四）四月に発病、出家以後の記事が大半を占める。敦光は亡くなる半年ほど前に、夢で没後の生所が定まっていなことを知つて以後、三宝に帰依して専ら往生を祈り、三十講、暁夕の懺悔法、念仏を行つてゐる。そして、一切経書写発願の記事の後に、付け加えるかのように、一生仏法

に帰依したことや法華經轉読等の行業があげられて「甄録するに違あらず」と記されている。この伝においても一切經書写が行業の代表として特記されているのである。

敦光が実際にどのような善業を修めたかは定かではない。しかし、白河院の石清水八幡宮奉納一切經の願文をはじめ、法会の願文等を数多く執筆しており、そこからは仏法に関する学識の深さがうかがえる。また、永観の『往生拾因』に「関白大相国」の命により、後序を書いたとされる。⁽⁵³⁾長承元年（一一三二）の「初冬述懷百韻」⁽⁵⁴⁾では、文学の士と博奕の徒に対して仏道を勧める内容の文を作っている。その一方で、敦光が世俗的な名利にとらわれていたことも否めず、この思いは官位を請うて奏上した文章に如実に現れている。⁽⁵⁵⁾しかし、本伝では出家後の敦光に「式部大輔、右京大夫、正四位、帝王の師、遺恨なしと謂うべし」と語らせているように、そのような様子は読み取れない。また、夢で焰魔王の臣下となるよう召されたことや、不動明王から宝器を授かったこと等、仏との関係を重ねて説いている。

そして、臨終の時、藤原忠実の出家の戒師も務めた中川聖（実範）を善知識として受戒して安らかに亡くなり、後日、往生の奇瑞を得ている。撰者は、冒頭の賞賛の言葉と共に、敦光を理想の往生人として描いている。

敦光は、夢で生所が定まっていなかったことを知り、行業を積むなかで一切經の書写を發願したが未完となったため、子息に遺志を継がせて往生した。敦光の一切經書写が実際に行われたか否かは不明である。しかし、往生伝では遺族が一切經書写を引き継ぎ、追善することを勧めているのである。

すでに指摘されているように、敦光と撰者の藤原宗友は信仰や作文を介したつながりがあった。⁽⁵⁶⁾また、前述のとおり三善為康は『後拾遺往生伝』藤原為隆伝において、為隆の墓に詣でた宗友の姿を記している。一方、前に述べたとおり行盛は為隆との交流があった。そして、行盛と敦光との関係も深い。行盛の献策の際、問頭を敦光が務めている。その後、二人は共に作文会に参加したり、法会の願文や呪願文を作成したりしていた。⁽⁵⁷⁾このように往生伝において、一切經を書写した貴族の往生人と撰者は、同時代を生き、それぞれ何等かの関係があったのである。その関係は勸学院別当（藤原為隆）、文章博士（藤原行盛と藤原敦光）と、いずれも文人貴族と関わり深い位置にあったことは興味深い。彼らのなかで往生の行業として一切經が注目されていたことを指摘することができるのである。

十・十一世紀に院や摂関家を中心に行われていた一切經書写は、十二世紀になると院側近の間でもさかに行われるようになった。そのような時期に、一切經を書写して往生した貴族が

往生伝に収録されているのである。

一方、永久三年（一一一五）から康治二年（一一四三）にかけて秦氏により書写された松尾社一切経中の跋文のなかには、「書写力」をもつて一族や衆生などの現世の身の堅固と、所願成就、浄土往生を願う一文が記されている。⁽⁵⁸⁾一切経の「書写力」の功德が信じられていたことも併せて考えると、当時、一切経書写の功德に対する信仰がいかに深かったかを改めて知ることができる。

四 その他

仏教聖典の総称である一切経は、仏法の象徴でもあった。平安時代には、しばしば一切経を供養する法会が行なわれた。その様子は一例ではあるが、往生伝にも描かれている。

②源忠遠妻伝（『続本朝往生伝』）

源忠遠妻伝では往生を示す夢の話として、天神法楽の一切経会に往生人が登場している。『北野天神御託宣記文』正暦元年（九九〇）の御託宣によると、天神道真は「一切経論」欲_レ令_二書_一写_二道心ノ人仁難_レ会志。我家_二末孫乃此_一願_レ於可_レ遂人、忽_二以_一難_レ有志。向後ニ可_レ出来。」と託宣したとされる。⁽⁵⁹⁾『天満宮安楽寺草創記』によれば、安楽寺には永暦元年（一〇七七）別当基

円により「一切経蔵」が建立され、同年十月二十七日に経供養会が行われている。⁽⁶⁰⁾

同じく天神を祀る北野天満宮も、『百練抄』によると永久三年（一一一五）六月一日に聖人が「於北野廟前、供養一切経」しており、天下の貴賤が結縁している。⁽⁶¹⁾

平安時代半ばになると社寺へ一切経が奉納されて経会が盛んに催され、年中行事となつていく。行事化された著名な例が宇治平等院の一切経会であろう。平等院一切経会は、延久元年（一〇六九）に藤原頼通が行つて以降、年中行事化され、その後、各地の社寺でも行われた。⁽⁶²⁾

忠遠妻の往生伝は、各地で一切経会が隆盛した頃に撰述された。妻が夢で菩薩の装束を着けたことにより、往生人であることを象徴している。これは一切経会で行われた「菩薩の舞」⁽⁶³⁾になぞらえたものと考えられる。この舞は極楽浄土を演じる舞である。一切経会は仏の世界を表したものであり、極楽への結縁を願う法会であつたことを物語っている。

また、忠遠妻は師僧の覚_レ嚴に『観無量寿経』⁽⁶⁴⁾を読誦してもらうことで、往生の場所が中品下生から上品へと転じられると語っている。⁽⁶⁵⁾これは、追善としての『観無量寿経』読誦の功德が勧められたものである。

忠遠妻は『観無量寿経』の追加読誦により九品の階位を上げ

ようにした。『続本朝往生伝』では、往生は困難なものであることを繰り返し述べられている。例をあげると、「一〇 権少僧都覚超」は「往生は難中の難なり」と語り、「三一 大江為基」は多年、念仏していた。一旦亡くなり、蘇生した時に「甚だ遺憾なり。下品下生ならくのみ」と述べている。

また、行業も法華經書写や読誦、念仏等が主であり、『拾遺往生伝』以後にみられるような多種大量の写経や造寺造仏は見られない。同様のことは『日本往生極樂記』にもいえる。一切経は行業としてではなく、仏法の象徴として表れているのである。

おわりに

以上、本論で考察したように、往生伝は、一切経と往生の關係を説くことにより、一切経に結縁する功德を普及させていたのである。往生伝の編纂時期が下るにつれて、修学や研究のための一切経ではなく、書写のための一切経が語られることが多くなったことは、一切経書写への結縁が往生の行業・作善として受容されていることを物語っている。

書写された一切経は各地の寺院、霊地へと納められ、一部は先述のとおり僧の勉強に用いられた。その靈驗功德譚は、やが

て多くの勸進聖を経て、全国各地の民衆へと伝わるのである。

平安時代末には重源による宋版一切経の施入が代表するように、宋版・高麗版などの校訂を重ねた大陸の版本一切経が将来されるようになる。これらは、日本で書写された一切経に代わり、貴族や武士たちによって各地の社寺に奉納された。書写から版本へと代わることで、財力のあるものには、一切経供養が容易となり、武家社会の仏事作善として定着した。しかしながら、海外の一切経がこのように盛んに施入されるようになるのも、院政期における往生伝の普及があつたからこそ、可能となつたものである。

また、鎌倉時代になると、法然の造像起塔の否定に代表されるように、念仏勸進において写経や造像等の行業を求められることは減少していく。しかし、往生伝を通して一切経が普及したことは、多くの人々が仏法に結縁したり、仏法への理解を深めたりする契機となつたのであり、日本史における一切経の受容と展開を評価する上で見逃すことのできない功績といえよう。

註

(一) 往生伝にはかなりの研究の蓄積があるが、本稿と関係深い総合的な研究としては、重松明久『日本浄土教成立過程の研究』（平楽寺書店、一九六四年）、古典遺産の会編『往生伝の研究』（新説書社、一九六八年）、井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、一九七五年）。撰者、成立に関する面は小

- 原仁『文人貴族の系譜』（吉川弘文館、一九八七年）がある。
- 平安時代の造寺・造仏・写経は、美術史の立場から個別に作品の研究が進んでいるが、平安時代の作善については、高木豊『平安時代法華仏教史の研究』（平楽寺書店、一九七三年）、三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会、二〇〇〇年）などが史料から論じている。小稿を考察する上で上川通夫「一切経と古代の仏教」（愛知県立大学文学部論集）（日本文化学科編第一号）第四七号、一九九九年）に掲載の「一切経年表」を参考とした。また、往生伝と一切経については拙稿「説話にみる聖と一切経」（『宗教研究』第七六巻四輯、二〇〇三年）参照。本稿における往生伝の引用は井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記』（岩波書店、一九七四年）による。
- (2) 空也伝の研究については堀一郎『空也』（吉川弘文館、一九六三年）、平林盛得『聖と説話の史的的研究』（吉川弘文館、一九八一年）、小原仁『文人貴族の空也観』（『文人貴族の系譜』第三章三節所収、一九八七年）、石井義長『空也上人の研究』（法蔵館、二〇〇二年）参照。
- (3) 井上・大曾根両氏前掲書、二五三頁頭注「源教」参照。
- (4) 堀池春峰「平安時代的一切経書写と法隆寺一切経」（『南都仏教史の研究』下所収、法蔵館、一九八二年）参照。
- (5) 『多武峰略記』には、経還に関する一つの挿話を収めている。多武峰炎上の初度は永保元年（一〇八一）三月一日であった。多武峰検校の弟子・玄智と興福寺知事・円快との諍いを発端に、興福寺堂衆が多武峰を襲撃して掠奪・音石の民戸を焼失させた。多武峰側も騒動となり、まさに合戦を企てようとした時、経還が「若相戦者、両方人多以將死。僧侶之行豈可然乎。吾不可見如此之惡事」と言って山を離れようとしたので、檢校以下は合戦停止に同意して、鳥居戸に出向き、上人を留めた。経還は檢校等にも一目置かれる僧として描かれているのである。多武峰の歴史については「多武峰一山の開基とその発展」（『桜井市史』第一章第四節、一九五七年）参照。
- (6) 『尊卑分脈』二巻、武部卿大納言真楠子、内磨の末流。
- (7) 良忍は史料の不足により、実像には不明な点が多い。往生伝における良忍伝については西口順子「院政期の大原別所」（『平安時代の寺院と民衆』、法蔵館、二〇〇四年）参照。
- (8) 『続伝燈廣録』第七（『統真言宗全書』所収）「醍醐寺運覚ノ伝」。ただし、この伝に一切経書写の記事はない。
- (9) 大曾根章介「院政期の一鴻儒―藤原敦光の生涯―」（『国語と国文学』五四―八、一九七七年）参照。
- (10) 現存する『空也誄』の諸本は脱字、欠字が多い。そのため本稿では三間重敏「空也上人誄」の校訂及び訓読と校訂に関する私見（『南都仏教』四二号、一九七九年）、石井義長「空也上人誄」の校訂（石井氏前掲書、第二章第二節所収）を参考とした。
- (11) 説話における空也の姿は時代によって変化している。初めは人々の間に入って活発に活動する空也も、時代が下るにつれて、靈驗や高僧への教化が説かれ、やがては遁世的な念仏聖像へと変貌をとげる。拙稿「説話における空也の研究」（『印度学仏教学研究』五十巻二号、二〇〇二年）参照。それと比例するように六往生伝中、編纂年代が降るにつれて、学僧に混り、専修念仏のみで往生を遂げる念仏者が増えていることは興味深い。
- (12) 『大日本仏教全書』六十巻、図像部十「阿婆縛抄」所収。
- (13) 『新訂増補国史大系』第三十一巻「日本高僧伝要文抄・元亨釈書」所収。

(14) 『阿婆縛抄明匠等略伝記』 空也伝は阿弥陀聖としての活動に一切触れられていないことが注目される。記事は地方での遊行、延昌による受戒、造像勸進、藤原師氏の葬送等であり、その活動は天台僧としての空也であり、『六波羅蜜寺縁起』の空也像に近いものとなっている。

(15) 洪谷慈鑑編『校訂増補天台座主記』(一九七三年)。

(16) 井上・大曾根両氏前掲書、二九二頁補注。

(17) 『三外往生記』は学僧の往生があげられるが、その一方で仏法を学ぶにもその身が稚拙であると感じたり(「八 相助大徳」、学問を好まない(「二一 沙門隆尋」、学んでいても浄土往生を願うあまり世事をなげうって念仏だけに打ち込み往生する(「六 沙門祥蓮」)等、往生のための修行的な行業だけに打ち込む僧が数例いる。また、往生を願って焼身・入水往生する(「三 薩摩国無名上人」「二〇 金剛定寺上人附小児」「二六 江州入水上人」等)など、往生のための修行を専ら行う僧が六往生伝中最も多く取り上げられている。

(18) 註(7) 西口氏論文参照。

(19) 『国文東方仏教叢書』第二輯第一巻法語部上(東方書院、一九三一年)。

(20) 良賀、永意については註(7) 西口氏論文参照。

(21) 六往生伝のなかで座主の往生は、慈覚大師円仁(「天台座主三世」、増命(十世)、延昌(十五世)(以上『日本往生極楽記』)、慈忍僧正尋禪(十九世)(『続本朝往生伝』)、安恵(四世)、陽生(二十一世)(以上『拾遺往生伝』)、慈恵大師良源(十八世)(『後拾遺往生伝』)の以上七例ある。円仁、増命、安恵、良源らは仏法興隆の功績や奇瑞、靈驗譚が多い。その一方で延昌、慈忍、陽生のように座主となる者でも、浄土を欣求して往生の

行業を専らとする者もいる。往生伝の編纂時期が下るにつれて、往生人に公請は望まれない傾向にあった。

(22) 『金峯山寺史料集成』(国書刊行会、二〇〇〇年)。「十三代要略」では「金剛王示現」と記す。

(23) 『扶桑略記』寛治七年九月二十日条、「中右記」寛治九年九月二十二日条。

(24) 小野政孝派遣は『後二条師通記』寛治七年十月二日条。僉議は「中右記」十月十五日条。堂供養は『後二条師通記』嘉保三年七月八日条。

(25) 大江匡房「内大臣家施入鐘一口金峯山状」(『本朝統文粹』七)。

(26) 藤原道長、師通等の金峯山埋経については関秀夫『平安時代の埋経と書写』第一章「金泥を使った埋経」第一節、第二節(東京堂出版、一九九九年)、金峯山経塚遺物については帝室博物館編『金峯山経塚遺物の研究』(東京堂出版、一九七九年復刻)参照。

(27) 堀池春峰「修験道と吉野」(『南都仏教史の研究』下、法蔵館、一九八二年)。

(28) 註(4) 参照。

(29) 先行研究として三宅敏之「富士曼荼羅と經典埋納」(五来重編 山岳宗教史研究叢書一四『修験道の美術・芸能・文学』I 所収、名著出版、一九八〇年)、同「富士上人末代の埋経」(『経塚論攷』所収、雄山閣出版、一九八三年)等がある。

(30) 『新訂増補国史大系』第三十巻「本朝文集」所収。藤原茂明の作。

(31) 『本朝世紀』久安五年五月十三日条。

(32) 東名寺上人の一切経供養は嘉承元年(一一〇六)九月二日条。

白河上皇の法勝寺金泥一切経供養については天仁三年（一一一〇）三月九―十一日条。

- (33) 『摩訶衍宝藏経』「仏説稻芋経」の奥書（『平安遺文』題跋編一三三二）。

- (34) 「十一月晦日於春日社頭一切経転読始之。自花厳院始之。」（『続群書類従』第二十九輯下雑部）。

- (35) 『後一条師通記』によると翌年、寛治五年六月二十一日の条で師実が三条殿で行った一切経転読について「先日春日有一切経御読経事云々」と記し、その関連を示唆しているとする（上川通夫「一切経と中世の仏教」『年報中世史研究』二四、一九九九年）。

- (36) 白河院に関する一切経の記事は康和二年の正月と七月にみられる。正月十五日に行われた読誦については『中右記』目録、康和二年一月十五日条「正月十五日、院於春日御社、被始一切経御読経」、七月六日の例は『興福寺別当記』「康和二年七月六日、春日社一切経始、白河院御願」、『興福寺別当次第』「康和二年、白河院春日一切経被加置」、『南都七大巡礼記』「春日社毎日不退一切経転読者、白河院御願也、康和二年七月六日始之」とある（『大日本史料』第三編之五所収）。

- (37) 『殿暦』永久五年正月八日条。

- (38) 『百練抄』治承二年七月十五日条。

- (39) 春日社の遷宮により宝殿四字が造営された記事は『中右記』長治元年四月二十二日条、忠実による五重塔（西御塔）落慶については『殿暦』永久四年三月六日条。

- (40) 若宮祭については『中右記』保延二年九月十七日条、鳥羽上皇御願の塔（東御塔）落慶については『百練抄』保延六年十月二十九日条。

- (41) 藤原氏の氏長者は、氏社氏寺神人大衆等の相互間または他との間の事件を、第三者の立場で勸学院において裁いている。そして、氏社氏寺等から氏長者へ要求がある場合は、勸学院を通じてなされており、弁別当も処理を担当していた。弁別当であった為隆もその任にあたっており、役職上でも春日社との関係があったことがわかる（桃裕行「平安時代初期の大学寮の盛容と大学別曹の設立」桃裕行著作集第一巻『上代学制の研究（修訂版）』（思文閣出版、一九九四年）所収）。

- (42) 為隆と宗友の関係については、小原氏前掲書、第八章「藤原宗友の思想と信仰」参照。

- (43) 講経に関する研究は、これまで法華講が中心であった。平安時代の法華講については高木氏前掲書、千日間の講経については龍口恭子「千日講の基礎的考察」（千葉乗隆博士古稀記念『日本の社会と佛教』永田文昌堂、一九九〇年）参照。

- (44) 敦光女伝は『三外往生記』五〇にもあげられるが、六角宣旨のことは記されていない等いくつかの記事の相違が見られ、両伝が各々独自の資料に依拠していることがわかる（小原氏前掲書第七章「蓮禪の思想と信仰」）。

- (45) 春季仁王会の呪願文は大治二年三月十日条、白河院四十九日の願文作成は同年八月十七日条。その他、大治五年十月五日条では比叡山総持院供養において呪願文を作成している。

- (46) 長承元年十月七日、同年十二月三十日条。

- (47) 往生伝における造像については拙稿「念仏往生と作善」（『印度学仏教学研究』第五二巻第二号、二〇〇四年）参照。『観無量寿経』では、もし心から西方に生まれたいと欲すれば、「まず、一の丈六像、池水の上に在ますを觀るべし」と説く。そして、無量寿仏は身無量無辺にして、凡夫の及ぶことではないが、

如來の宿願力のゆえに憶想しさえすれば必ず成就することができると説く。『往生要集』卷下大文第八は「念仏の証拠」として、この一文を引用して、念仏をもって往生の業となすことを示している。このように仏を觀想する手だてとして丈六仏の造像も勧められたと思われるが、丈六仏造像自体が往生の業因となつたことを示す經典類は不明である。

- (48) 運覺がいずれの一切經を底本として書写したかは定かでない。また、当時の醍醐寺の一切經についても確認できなかった。保元元年（一一五六）座主元海が三寶院經藏に安置された一切經ならびに宗章疏、伝記等の聖教が散逸しないため、寺から出さないことを起請文に書き、代々の座主の誠めとしている（座主元海起請案〈『平安遺文』六、二八四二〉）。これがいかなる由緒の一切經かは不明であるが、運覺没後、十數年後には同寺に所藏されていたことが知られる。

- (49) 『宇槐記抄』仁平元年十月七日条。

- (50) 『本朝世紀』四〇、仁平元年十月七日条。その他、『百練抄』にも供養が行われた記事が掲載されている。

- (51) また、同じく『宇槐記抄』によると定信は一切經供養の三日後、多武峰において出家している（六十四歳）。

- (52) この記事は頼長の日記『台記』に見られない（『古今著聞集』頭注（一五）〈新潮社、一九八三年〉参照）。しかし、『宇槐記抄』仁平二年七月二日条には、「生光定信法師、入來、余盥嗽、端「衣装」、先禮拜、自書「一切經、已遂「供養」、渴仰同「仏、故禮拜之」という記事が見られる。

- (53) 『往生拾因私記』卷上、『私聚百因緣集』八永觀条。

- (54) 『本朝統文粹』一所収。

- (55) 註（九）参照。

- (56) 註（44）小原氏前掲書第七章、第八章参照。また、敦光、茂明等と為康については西口順子「往生伝の成立―三善為康の往生伝を中心に―」（『平安時代の寺院と民衆』、法藏館、二〇〇四年）参照。

- (57) 行盛の献策については『中右記』康和四年正月十一日条、作文会参加については『中右記』天永二年十月五日（講師行盛）、元永二年十月三日条（講師行盛、序者敦光）。藤原顯季邸「柿本人麿影供」歌会については『本朝統文粹』十一、「朝野群載」一（序者敦光）。比叡山總持院供養は『中右記』大治五年十月五日条（呪願文行盛、願文敦光）。

- (58) 中尾堯「院政期の松尾社における一切經供養をめぐって」（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法藏館、二〇〇二年）参照。

- (59) 『神道大系』神社編十一北野所収（神道大系編纂会、一九七八年）。安樂寺における天神と仏法に関しては今堀太逸「天満天神信仰の成立と変遷」（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』所収、法藏館、二〇〇二年）参照。

- (60) 『天満宮安樂寺草創記』（『神道大系』神社編四十八太宰府所収、神道大系編纂会、一九九一年）。

- (61) 『百練抄』永久三年六月一日条。また、北野社一切經藏は後世の資料ではあるが、洛中洛外図にも描かれ、室町期に書写勸進も行われていたことが知られる。

- (62) 平安時代の一切經については註（4）参照。平等院一切經会については齊藤利彦「平等院一切經会と舞楽」（『仏教史学研究』第四二卷第二号、二〇〇二年）参照。

- (63) 『教訓抄』（天福元年〈一一三三〉、伯近真撰）卷四によると「菩薩」は「天竺ノ舞樂」であり、東大寺大仏開眼の導師を務

めた「婆羅門僧菩提」と「仏哲師等ノ化人等」が日本へ伝えたとする。同書はこの舞は近來絶えた舞ともいわれ、一部の者が相伝したといわれるがその舞の手を見ることがないと記す。

(64) 覚厳は『三外往生記』良忍伝中、夢で良忍に往生を告げられた大原律師覚厳と同一人物と考えられる(井上・大曾根前掲書、補註四四五頁参照)。藤原家房の子で、康和五年(一一一一)法勝寺大乘会の講師を務めた。天永二年(一一一一)権律師。大治三年(一一二八)に権律師、法勝寺学頭ならびに諸寺供僧等を辞退。長承元年(一一三二)七十一歳で没した(『僧綱補任』。生前は法勝寺、尊勝寺をはじめ法皇、中宮の仏事にも参加している。一人の僧が二人の往生人の証人となっていることは往生伝作成の経緯を考える上で興味深い)。

(65) 『観無量寿経』によると「中品下生」の人とは「若有善男子善女人、孝養父母、行世仁慈。此人命欲終時、遇善知識、為其広説、阿弥陀仏、国土樂事、亦説法蔵比丘、四十八願。聞此事已、尋即命終、譬如壯士。屈伸臂頃、即生西方、極樂世界」と説く。中品中生以上は戒を保持する者であること、下品上生以下では悪業を作る者と説かれるので、源忠遠妻は「中品下生」に相当する記述となつていことがわかる。